

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある河の辺に、狐、魚を食ひける折節、狼、飢に臨んで歩み来り、狐に申すやう、「その魚、少し与へよ。餌食になしてん」といひければ、狐申しけるは、「あな、恐れ多し。」¹我がわけを奉るべきや。籠をつ、持ち来らせ給へ。魚を取りて参らせん」といふ。狼、ここかしこと駆け廻つて、籠を取つて来りける。狐、教へけるやうは、「この籠を尾に付けて、川の真中を泳がせ給へ。跡より魚を追い入れん」といふ。狼、籠を括り付けて、川を下りに泳ぎける。狐、跡より石を取入れければ、次第に重くて、一足も引かれず。狐に申しけるは、「魚の入りたるか、殊の外重くなりて、一足も引かれず」といふ。狐申しけるは、「さん候。殊の外に魚の入りて見え候程に、我が力にては、引上げ難く候へば、³獣を雇ひてこそ参らめ」とて、陸に上がりぬ。

狐、あたりの人々に申し侍るは、「かの辺の羊を食らひたる狼こそ、只今、川中にて魚を盗み候」と申しければ、我先にと走り出、²散々に打擲しける。

(「伊曾保物語」から。)

(ア) 線1「あな、恐れ多し。」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 私が捕った魚を食べてくださるとは、なんとありがたいことだ。
- 2 私を餌として食べるとは、なんと恐ろしいことだ。
- 3 私ごときが食べた余りを食べてくださるとは、なんとありがたいことだ。
- 4 私が食べた余りを差し上げるなど、なんと恐れ多いことだ。

(イ) 線2「狐、跡より石を取入れければ」とあるが、「狐」がそのようにしたのはなぜか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 魚が籠に入つたように見せかけて、「狼」を動けないようにするため。
- 2 実際よりもたくさん魚が籠に入つたように思わせて、「狼」を満足させるため。
- 3 「狼」の尾に付けている籠を安定させて、魚を入れやすくするため。
- 4 後ろから「狼」に石を投げつけて、「狼」をこらしめるため。

(ウ) 線3「獣を雇ひてこそ参らめ」とあるが、「狐」は実際にはどのようなことをしたのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「狼」に何度も獲物を横取りされて怒っている獣たちに、「狼」が川の中で動けずにいると知らせに行った。

2 「狼」に羊を食べられて恨みをもっている人間たちに、「狼」が川の中で魚を盗んでいると知らせに行った。

3 「狼」に獲物を奪われて困っている獣たちに、「狼」が償いとして川の中で魚を捕まえていると知らせに行った。

4 「狼」に羊を奪われて飢えに苦しんでいる人間たちに、「狼」が魚をたくさん捕まえた知らせに行った。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「狐」は、腹をすかせた「狼」に自分の捕った魚を分け与えるために、籠を一つ見つけて持つてくるようにと言った。

2 「狐」が「狼」に、籠を尾に付けて川の真ん中を泳ぐように言うと、「狼」は「狐」のことを疑いもせず、言われたとおりにした。

3 「狼」の尾に付けている籠が予想外に重くなったので、「狐」は自分の力では引き上げられないと思つて逃げてしまった。

4 「狐」が、「狼」が川にいることを告げて回ったところ、「狐」が魚を盗んだと勘違いした人間たちに「狐」自身がひどく殴られてしまった。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これも昔、天然^(注)に、身の色は五色にて、つもの色はしろき鹿^{しか}一有りけり。深山^{みやま}にのみ住て、人にしられず。その山のほとりに大なる川あり。其山に又鳥あり。此^(注)かせきを友として過す。

或時^{あるとき}、此川に男一人ながれて、すでに死なんとす。「われを、人たすけよ」とさけぶに、このかせき、このさけぶ声をききて、かなしみにたへずして、川をおよぎよりて、この男をたすけてけり。男、命のいきぬることをよろこびて、手をすりて鹿にむかひていはく、「何事をもちてか、この恩をむくひ奉るべき」といふ。かせきのいはく、「何事をもちてか恩をばむくはん。ただ、この山に、我ありといふことを、ゆめゆめ人にかたるべからず。わが身の色五色なり。人しりなば、皮をとらんとて、かならず殺されなん。このことをおそるるによりて、かかる深山にかくれて、あへて人にしられず。しかるを、なんちがさけぶ声をかなしみて、身²のゆくすゑ^{かた}を忘て、たすけつるなり」といふ時に、男³「是誠^{まこと}に理なり。さら^(注)にもらす事あるまじ」と、返々契^(注)てさりぬ。もとの里にかへりて、月日を送れども、更に人にかたらず。

(注) 天然 今のインド。

かせき 鹿の別名。

(「宇治拾遺物語」から。)

(ア) —線1「この男をたすけてけり。」とあるが、「鹿」が「男」を助けた理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 人間の「男」が死にものぐるいで川を泳いでくるのを見て不思議に思い、「男」の素性を確かめようと考えたから。

2 一人きりで川を流れてきた「男」が自分の境遇と似ていると感じ、何としても助けなければいけないという気持ちで湧いてきたから。

3 自分を捕まえるために来た「男」であっても、必死に助けを求めている以上、救ってやるのが当然だと思ったから。

4 川を流れてきておぼれそうになっている「男」が助けを求める声を聞いて、見殺しにするわけにはいかないと思ったから。

(イ) —線2「身のゆくすゑ」とあるが、それはどんなことか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 助けてやった「男」から恩に報いてもらい、今度は自分が救われること。

2 流されていた「男」を助けることができずに、後悔しながら生きていくこと。

3 自分の存在が人間に知られ、捕まって殺されてしまうこと。

4 「男」を助けようとして、自分が急流にのまれて死んでしまうこと。

(ウ) —線3「是誠に理なり。」とあるが、「男」はどんなことを「誠に理なり」と思ったのか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 死にそうになっていた「男」を救った「鹿」が、「男」に対してすぐに恩を返すように要求していること。

2 体の色が五色の「鹿」が、人間に見つかることをおそれて山奥に隠れていることを秘密にしていると言っていること。

3 体の色が五色の「鹿」が人間に見つからずに生きてこられたのは、山奥に隠れていたからだということ。

4 おぼれかけていた「男」を救った「鹿」が、命を助けるほどの恩に報いることなどできないと言っていること。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 助けを求めている「男」を哀れに思った「鹿」は、友達である「鳥」が止めるのも聞かずに「男」を救い出した。

2 「鹿」に助けてもらった「男」は、「鹿」の体の色が五色であることに驚いたが、気がつかないふりをしていた。

3 体の色が五色の「鹿」が人目をしのいで山奥で生きなければならなかったのは、自らの体の色が原因であった。

4 「鹿」に助けてもらった「男」は、恩に報いるために自分の里に「鹿」を連れて帰り、他の人間からかくまった。